

# パーソナルの保護者通信

## 第10号 恵まれた才能に驕ることなく努力せよ

保護者の皆様へ。いつも大変お世話になっております。

数学(算数)という科目は、才能の度合が個人差として大きく現れます。人一倍努力していくとなかなか学力が上がらない、大して努力していないにも関わらず上位成績を修める、という現象は珍しくありません。

前提として、数学、ひいては勉強全般において“天才”は確かに存在しています。数学においては0を1にする力、1を10ないし100にする力があり、教科書内容の説明を聞いただけで多くの応用問題を予想しそれらを1つの体系にまとめ上げ、中学までは学校の授業を聞くだけで日々と定期テストで100点を取ります。定期試験前にも数学の勉強は殆どせず、総合順位を上げるために他科目に勉強時間を確保する方が効率的です。こういう生徒は初めから、または幼少期に鍛えた能力として数学的思考力がすでに高いレベルで身についていて、高校卒業までの数学では基本的に困ることもありません。上昇志向がある者は高校入学前から先んじて高校数学に手を付けていて、数学検定準2級～(高校以上)の取得をしています。

棘のある表現にはなりますが、悲惨なのは“中途半端な才能”を持つ者がその能力に驕ってしまうことです。100点を取れていないのに結果に甘んじていたり、中途半端な努力で中途半端な結果を得ているだけのことを“本気でやればいつでも挽回できる”と高をくくっていたり。そういう者は真っ当に努力を積み重ねている生徒にいざれ確実に追い抜かれてゆきます。中学の定期テストで日々100点を取れないのであれば、才能だけで高校数学をやっていくことは出来ません。周りに追い抜かれたときには努力の仕方も知らない状況で、手遅れです。

良くない例として、“5科目の中で数学が一番点を取れている”という理由だけで「自分は数学が得意なんだ」と思い込んでしまうことが挙げられます。得意を自覚すること

自体は大いに結構ですが、それにかまけて努力をしないようでは当然いけません。“得意を更に得意にする”という意気込みを持ち、努力を重ね更に力をつけていくべきです。

さて、大学受験において、数学の難易度は青天井です。毎年新たな入試問題が作成され、それを毎年指導者は研究し、生徒は鍛えられ、入試問題は進化し…このいたちごっこです。有名な話では 1954 年に東大で“閻魔の唇問題”が出題されて以降、実数の存在条件に関する問題が様々な大学で出題され、いつしか難関大では対策必須の問題となりました。今では一般的に使われる教科書傍用参考書である 4STEP にも全く同じ難易度の問題が収録されるに至っています。

本通信の題目にて“才能に驕ることなく努力せよ”と述べました。入試で満点を取ることはほとんど不可能であり、言い換れば最上位層であっても大きな得点差がつきます。どんなに鍛えても鍛えすぎることはありません。どんなに才能に恵まれていても、努力をしない理由はないのです。勿論、数学に限らず様々な科目において言えることでしょう。

余談ですがこれまでの指導人生で最も“才能豊か”に感じた生徒の1人は鬼のように努力をされていました。私の認知していない発想をその場で思いついて書き出したり、1週間で骨太の参考書を2周してきたり、才能も努力量も規格外でした。開いた口がふさがらない経験を何度もして、「負けた！！！」と(心の中で)叫ぶこともあり…。とても謙虚な姿勢で私の授業を聞いてくれていたことが当時の私にとっての救いでした(笑)。その生徒は立派に、危なげなく○大学獣医学部に進学しました。きっと私の授業を受けずとも合格を勝ち取っていたことでしょう。私のおかげで受かったのだとすれば、彼の字はなかなかだったので、「丁寧な字で、採点者が読めるように書きなさい」という指導によるものでしょうか…。

当時、定期試験前の対策授業にてある問題が解けなかったその生徒が「(その参考書の学習が)まだ 4 周しかしていないので。」と発言したことを、今後も忘れるることは無いでしょう。

今週もご覧いただきありがとうございました。

種市 匠